
USUALLY

翠白かのん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

USUALLY

【コード】

N2978Q

【作者名】

翠白かのん

【あらすじ】

俺の名前は倉橋^{クラハシツカサ}司。もうすぐ高校1年生になるごく普通の中学3年生だ。

受験に合格したある日、近くの本屋まで久しぶりに漫画を買おうとしたら、そこで5年以上会っていなかった従姉妹に再開したのだ。あの時とはまるで違う我が従姉妹。俺をヲタクの世界に引き込もうとするどうしようもない我が従姉妹。

俺を取り巻く普通で普通じゃない仲間たち、そんな俺達の高校生活が始まるうとしている…。

合格（前書き）

初投稿です、まだ慣れていませんが頑張ります!!

合格

「- 受かったのか…?」

夢のようだった。

あの日、あの場所で俺は第一志望校の合格を告げられた。いよっしやあああああ!!!と俺は心の中で叫び出す。このこみ上げる思いを何処かへぶつけたくなった。

早く親や親せきに伝えたい、そして何よりこの解放感がたまんねー!!!

進学校に行くんだから、これからの苦労は半端ないことくらいは分かかって…: まあ分かてるか分かかってないかって言ったら分かってない。

とにかく、この解放感に浸るがままに浸りたい。ストレスで少しばかり生えた若白髪が眩しいぜ!!!

廊下に出ると、まだ合否の報告を先生から告げられていない生徒たちが見待機していた。

もうこいつらの中には、自分で合格発表を見に高校まで行っていて合否が分かっている生徒もいる。

そう、俺は誰もいない空虚な教室で先生と二人きり、そこで合格を初めて知ったのだ。

絶対落ちたと思っていた、担任からも親からも塾の先生からも俺の合格はまず無い、まあ前期だしダメもとても挑戦してみるか。といった感じだった。

入試テストが終わった時、確かな手ごたえを感じたのを覚えている。でも周りから「落ちる落ちる」って言われ続けてきたから、多分気のせいだろうと抑え込んでいた。

だから合格発表を見に行かなかった。しかしあの合格者の受験番号

が載った張り出し紙の中から自分の番号を探し当て、見つけた時のあの最高の気持ちをかみしめてみたかった。

「司あ…どうだった？」

不意に親しみのある、しかしとても重みのある声が聞こえてきた。

「俺、落ちたあ…」

そう言っただけで泣きついてきたのは、俺の親友であるソラ…ソラノテツペイ空野鉄平。

「後期かあ…あと1ヶ月あるなあ…。司あ…、俺どうしたら良い…？」

「まあ、こうなることは承知の上だったからまだ大丈夫だけど…」
うーんと唸る。

さっきまで心臓が飛び出るほどに歓喜に満ち溢れていた俺も、急に心が曇る。

そっか…ソラは…、

「うおおおお！！次はぜってー合格してやっからな！！受験の神！！！！」

ソラは泣きだしたかと思えば急に空を見上げて大声を出した。

玄関まで響いたらしく、一同ソラを見た。

「ちよ、ソラ…何して…！！」

「司…！！」

「え、あ…ん？」

「俺が合格できるように、色々手伝ってくれよな！！」

「…ああ」

ソラはいつだって明るい、そして切り替えが早い。

俺はいつでもソラを尊敬していた。いつも俺を元気づけてくれた。

今度は俺がソラの為に何かするんだ

見つめ合う2人

合格が決まった週の日曜日、俺は近くの本屋に漫画を買いに来ていた。

今までずっと我慢していた漫画たち…まあ少ない小遣いだから節約して今日は2冊しか買わないが。

まあ、家に帰ったらまずは寝る。漫画を読まずに寝る。…今まで本当に疲れた、本当に眠い。

ガラス張りの壁に自分の姿が反射した。 - なんつう顔だ…、中体連後部活を辞めてすっかり運動しなくなったもんだからあの時よりもすんげー色が白くなってる。目の下には濃いクマ、猫背気味の姿勢…。

まさに究極まで追い込まれた受験生だな。

「あつた、これだ」

俺が大好きな人気漫画。これ超おもしろいんだぜー？ずっと我慢してきた！…うん、良いねこの爽快感！

不意に顔が緩みそうになった。マズイマズイ、ここでニヤけたらただの不審者だ。

俺は本を買うためにレジの方向に振り向いた。

- ん？

レジの一步手前に一人の女の子が立っていた。俺と同年くらいの女の子…。

別に女の子が立ってることくらいならどうでもいいが、その女の子はこっちをものすごい人相で見つめてきた。…いや、この場合は睨みつけてきたと言った方が無難か…。

しかしその女の子…

めっちゃくちゃ可愛い

何だろう…なんて言ったら良いか分からんがとにかく可愛いんだ！
！！

不幸中の幸いか…睨まれてるのはマジでつらいが、可愛いからなんていうか…胸が張り裂けそうだ。

だって俺…地味だし、一回も告白なんてしたことがなければされたこともない。

そんな恋愛には無縁な男なんだぜ？そんな俺が…あんな可愛い子に見つめられて（睨まれて）るなんて…ドキドキしっぱなしだ！

しかし不審だ…、その女の子は着ているダウンジャケットのチャックを一番上まであげてフードを被っている。店内は暖房がよく効いていてなんだか、俺自身顔が火照ってきている。不審者みたいなのは俺じゃなくてアイツだよな？

なんて考えていると気づけば2人は見つめあってしまっていた。俺はとっさに顔をそむけて横目で彼女を見たが、彼女は俺を微動だにせず見つめたままだった。目を細めじつとただ俺を見つめている。次第に俺の体が震えていることに気がついた。レジから遠下がつていく俺。

今日、何となく俺はあの子に殺される気がした。そのくらい彼女は俺をものすごい目で見つめているのだ。

「あつ…」

女の子がついに声を漏らした。目がパツと見開き逸らす。そしてもう一度俺に視線を寄せこちらに近寄ってくるのだった。

俺を見つめながらこちらへ近づいてくる美少女。怖いながらも少しの好奇心がわいたのか、俺は一步だけ彼女の方向に進んでいた。ついに彼女は俺の目の前に立った。真っ黒な瞳がとても綺麗だ。

「…あのさあ…」

彼女の口が開く。

「アンタ…倉橋司だよな？」

… は？

再会

「アンタ、倉橋司だよね…?」

何言ってるんだ、コイツ…

何で俺の名前知ってるんだよ…

「……………」

「…ち、違うん…ですか?」

少し砕けた表情をした彼女。拍子抜けかけた表情だ。

「…そうです…が」

思わず答えてしまった、俺に恨みでも持つてんじゃないかと黙つていようとしたが、もし「違います」と言えば彼女は恥ずかしくてこの場にいられないんじゃないかと思つたから。あんなにも見つめあつた後にそりやないだろ…みたいな。

「やつぱり…?! やつぱそーだよねえええ!!!」

おっしゃあああ!! と俺を抱きしめた。何が起こつたのかよく分かんねえ。しかし抱きしめられた。

「な、何すんだよ!」

かすかな嬉しさを抑えて彼女を払おうとするが、あまりにも抱きしめる力が強くそして何より彼女のこの嬉しそうな顔を見ると、出来なかつた。

ところで…

コイツは誰なんだ?

「あの〜」

「ん？なーに？」

さつきとは真逆にくったくのない笑顔を俺に向ける。俺は心臓が飛び出そうになるくらいドキドキしてるぜ…。彼女は何も思っていないのだろうか…というくらいの笑顔だった。

「…」

「どしたの？」

「あの…申し訳ないんですが…何処かでお会いしましたっけ？」

「え…」

一瞬で彼女の顔が曇る。ひきつるのではなく曇る。

「覚えてない…の？」

「うん…」

「そっか…」

彼女はハアアアと言わんばかりにその場でしゃがみこんだ。…と思いきやすぐに立ちあがって

「じゃあさ」

「クラハシメイ倉橋芽伊って名前は覚えてるか？」

「…あ」

倉橋芽伊：それは俺の従姉妹の名前だ。

7年会っていない俺の従姉妹…同じ年の芽伊…！！！！

「思いだしてくれた？」

まさかこんなところで会えるとは思ってもいなかった。同時に血縁関係であることに少しだけ…ほんの少しだけショックを受けた。

「まあ、しょーがないさ！7年も会ってなかったんだから…！私は一発で分かったけどねー」

得意げに胸を張る芽伊。俺の顔ってそんなに昔と変わらないっけ。それにしても嬉しそうだな。

あ、そういえば…

「あのさ」

「ん？」

「入試…受かった？」

「うん！だからここにいてるー」

まあ…そうだよな。

「高校何処に行くんだよ」

俺にとってはほぼ初対面なもんだから、少し言葉が不自然になつてしまう。

「北原高校ー」

「え」

「どーしたの？」

北原高校って…俺と一緒にじゃん！…！

「まさか…一緒？」

勘が良いな、俺はコクンと頷いた。

「マジで…?! やったー!! 嬉しいー!!」

「ちょ、静かにしろ!! ここ本屋だぞ?!」

「あ、そーだった! いっけねー!」

口を押さえながらこらえきれない笑顔をこちらに見せてきた。

「4月からよろしくねー」

「ああ…」

「4月に会えるんなら良いね、ここにずっととどまっていなくても」

「…あ？」

「私今日はもう寝たいんだ」

俺もだ、何だかすんげえ疲れた。受験の疲れもあるけれど、今のもっと疲れたわ。

「じゃあね、4月に会おうねー!」

ニツと口を上げて手を振る芽伊。俺も小さく手を振った。従姉妹つて知ったとたん何だか夢がぶっ壊れた気分だったが、本当に可愛い。ギャルみたいなテンションが高い奴あんま好きじゃないけど、アイツは何か何処か違うと思う。よく分かんねーけどさ。

取りあえず俺は、手に取っていた2冊の本をレジに回し、睡眠を確保するために少し急ぎ足で家に帰るのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2978q/>

USUALLY

2011年1月26日10時28分発行